NEWSLETTER
保育・子育て総合研究機構だより

2011.5.1発行　NO.18

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言　1、2歳児の発達…「自我の芽ばえ」を中心に

「発達」というとき、何の発達を中心に考えるかが第一に重要なポイントです。乳幼児の場合、身体機能の発達はいちばん目に見えやすい発達であり、生活習慣の自立も大きな発達課題です。それらが「できた！」という喜びは、本人はもとより家族にとっても保育者にとっても大きな喜びです。

しかし、障碍者を考えればわかるように、それらはたとえその一部が欠けていたとしても何らかの手段で補うことができるものです。

では、他の手段では補うことができない、そういう意味で最もだいじなものとは何かといえば、人としての心の核、心身の諸機能を束ねてどう行動し、どう自らの道を拓いていくか、その核となるものであり、それがどう育つかこそが乳幼児期の発達の最も重要な課題だと思います。

この「人としての心の核」を、多くの学者は「自我」という言葉で表現して来ました。そして、満２歳前後は「自我の芽ばえ」の時期とされています。この「自我の芽ばえ」は激しい自己主張の形をとることから、「自我」のことを「自己主張」とイコールに理解している人が少なくありませんが、それは違います。

『現代保育用語辞典』（フレーベル館、1997年）の「自我」の項を引くと、こう記されています。

「自我とは、自分に対する意識体験における主体としての意識即ち自我意識（ヤスパース、1913年）であるとともに、知覚、思考、感情、行為等の各精神機能を司る人格の中心としての意味（フロイト、1923年）をもっている。（以下略）」（吉田弘道）［下線は筆者］

１、２歳児の時期は、前記のような意味での「自我の芽ばえ」を育む時期として、心の育ちにとって大きな意味をもつ時期です。

……●……●……●……

この時期の「自己主張」はまだ幼いですから、多くの親は手を焼きますが、いくらか経験を積んだ保育者ならうまく先取りし、丸め込んでしまうことも可能です。しかし、それでは「主体としての意識」は育ちません。「わたしはこうしたい！」という思いを率直に出し、他者（親、保育者、友だち）の壁にぶつかって挫（くじ）け、葛藤することなしに、自分の中のさまざまな思い・感情・状況判断を自分なりに統合し、決断し、一歩を踏み出していく力は育ちません。

大人の指示に従って思い通りに動く「よい子」をつくってしまうことは、自我の芽ばえを摘み取り、自我の発達を歪めることになります。「調教」になじむ動物とちがって、人間の場合は後に予期せぬ逆襲に遭うことを覚悟しなければならないでしょう。

……●……●……●……

《１歳児クラスのＳちゃんはとても慎重なタイプ。歩き出したのも遅かったが高いところが苦手なようで、公園に行ってもすべり台には近づかない。

２歳４か月を過ぎた頃、担任が「少人数で、小さなすべり台ならいいかも」と考えて公園に行った。

最初に全員が小さなすべり台に群がり、Ｓちゃんも登った。頂上で暫く立ち往生したが、タイミングを見計らって腹ばいで後ろ向きに滑った。２、３回滑って「楽しいね！」と満面の笑み。ブランコに乗ってみると誰よりも漕ぎ方がうまく、またまた「楽しいね！」

「そろそろ帰ろうか」と集まりだしたとき、Ｓちゃんが１人で大きなすべり台のほうに向かった。担任の１人が残りの子を引き留め、もう１人がＳちゃんの傍でかかわる。頂上では高くて怖かったようで、担任と一緒に滑り降りた。

「お待たせ～」と皆のところに戻ってきたＳちゃんの表情は、達成感と安堵と充実感、いろいろな気持ちが混ざっていて、イキイキ軽快な足取りだった》

……●……●……●……

担任の配慮を超えて大きなすべり台にも自ら挑戦したＳちゃん。友だちはどんどんやっている。やってみ

ようかな、でもちょっと怖い…。自分と向き合ってきた長〜い時間があったにちがいありません。子どもが「よし！」と自分で決めて動き出す姿は美しいです。

保育者は揺れ動く子どもの気持ちに根気よく付き合い、子どもの言葉（言葉にならない言葉を含む）に耳を傾け、子どもが自分の中のいろいろな気持ちと向き合い自分で決めて一歩を踏み出すときを、子どもに寄り添いながらじっくりと待ちたいものだと思います。

（遠山洋一●東京・バオバブ保育園ちいさな家園長）

実践　関係の中で、仲間とともに育ち合う
…学ぶ主人公を支える１つの試み

運動会が終わった秋に、年長組の男児２人が扇風機を貸してくれとやってきました。「なにすんの？」と尋ねると、拾ってきた木を擦り合わせて火を熾（おこ）したい。けれど、その木が湿っているとのこと。代わりに借りた団扇（うちわ）ではらちがあかず、乾いた砂を掛けはじめたのは、泥だんごづくりの経験がここでいきたのでした。

それでも上手くいかずに悩んでいた２人に、「文庫に行ってみれば」と居合わせた保育者が一言。文庫に走った２人が迷わず手に取ったのは、理科の図鑑。そこに、火熾しの実験が載っていることを知っていたのでした。

ナイフを使って火熾しの道具づくりに試行錯誤を繰り返すうちに、仲間も増えていきました。

「火が熾きたらどうする？」「料理したい」「お風呂沸かして入りたい」「気球で空を飛びたい」と出たさまざまな意見の中に、「手裏剣をつくりたい」がありました。じつは土粘土の手裏剣を焚き火で焼きたいだったのですが、本物は鉄だと他児から教えられます。

「鉄ってなに？」、「マグマみたいにドロドロしたものが固まるとできる」（父親が新日鐵に勤めている子）、「鉄は磁石にくっつく」（小学生のきょうだいがいる）など、仲間から得られる知識が、次の関心に向いていきます。

……★……★……★……

磁石で鉄探しをしていくうちに、「砂鉄」を発見。「マグマみたい…」ならば、「この砂鉄を溶かせば手裏剣もできるのでは？」ということになりました。

「どうやって溶かす？」出てきたアイディアは、フライパンに入れて焚き火にかけること。ところが変化がない。水を入れて煮てみる妙案も成功に至らず。

図鑑でマグマは1200℃、鉄が溶けるのは1500℃だと知る。そこで、台所から借りてきた温度計で沸騰するお湯の温度を計ってみると100℃より上がらない。「煮たら冷めちゃうんだよ」と子ども。

ならば焚き火はと計ったら、一所懸命あおいでも900℃にしかならない。自分たちの知識では手に負えない。すると、Tが「鉄のことは鉄骨屋？」とお父さんから耳よりの情報を持って来て、街の鉄工所を４軒尋ねる。でも「くっつけるのはできても、溶かすのは新日鐵だな」とどこでもいわれ、がっかりするのです。

子どもたちの想いに応える方法はないのかしら。諦めずに探っていったら、刀鍛冶の大野さんにつながり、子どもたちが集めた25kgの砂鉄から薄刃の包丁が２本生まれたのでした。

……★……★……★……

保育園で製鉄をする。そんな話は聞いたこともないし、保育者からの発想では生まれるはずもない取り組みです。なのに、「たたら製鉄」が動き出し、包丁が仕上がっていくことになったのはなぜでしょうか？

私たちの園では、チャレンジしたいこと、不思議だなと思うこと、もっと知りたいこと、をみんなで調べてみる経験を、年長組さんの秋の生活目標に置いています。それは、課題をみんなで共有できて、お互いを調整し合い、役割を分担して、協働で課題に取り組む力が揃ってくるからです。でも、何に関心を示し、どう取り組むのかは、子どもたちに任されています。

ちなみに昨年の年長組さんは、園庭に掘った穴がどんどん成長し、アメリカ行きの挑戦になったのです。そして、掘り出した土から富士山もつくりたいと、本物の富士山の高さと身近な園舎の高さを比べて、計った園舎の高さ９m＝１和光という単位まで発見し、富士山は420和光、東京タワーは37和光に気づき、実際に東京タワーまで出向いて、その高さを実感してきました。

大きな流れ（生活の概観）は保育者がデザイン（保育計画）し、小さな流れ（日々の生活や遊び）は、子ども自らが主人公になって選びとっていくという関係

です。しかし、だからといって、子どもたちに判断を丸投げしてしまうのではなく、保育者はみんなが参加しやすいように配慮したり、小さな声も拾ってみんなにつなげながら、共同研究者・生活者として、みんなが主人公の遊びや生活を一緒に編みあげてきました。

……★……★……★……

保育園には「教育」がない。その誤解への挑戦もあって、「和光鉄研究所」の実践を、ソニー教育財団が募集する幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」に応募したところ、2010年度の最優秀園２園の１つに拾ってもらえました。

関心がある方は、ソニー教育財団の下記 URL に応募論文が掲載されていますので、ご欄いただけますと幸いです。

＊http://www.sony-ef.or.jp/preschool/

（鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長）

報告

もっと子どもを知りたい！ もっと保育者として育ちたい！

―保育を語り合う会＊ TSUMUGU…沖縄から発信

本研究機構が進めている「保育の質を高める体制と研修に関する研究」について、大豆生田啓友氏は、本ニューズレター No.9、10で次のように述べています。

「保育者は自分が子どもと向き合うだけで育つわけではありません。同僚との語り合いを通しても育つのです。本当の熟達者には、若手からも、保護者や実習生の言葉や態度からも学ぼうとする姿勢があり、だからこそ、ともに育ち合う関係が生じるのです」

そして、保育の質を高めるための重要なポイントとして「子どもの姿や自分の保育を振り返り（省察し）、それを語ることと、そうした子どもの姿や保育について語り合える園内の『対話的関係』や『同僚性』を形成すること」をあげています。

より子ども理解を深めていくために、保育者として育ち合うために、自分の保育を語り合う場が大切だとの思いで“保育を語り合う会＊TSUMUGU”を沖縄県で発足、「“子どもの育ちと学びの分かち合い”への招き」と題して研修会を開きました。ただ語り合う場にならないように、参加者一人ひとりが自分の保育観、子ども観を多角的に見つめられるように、本研究機構委員でもあられる森眞理氏にナビゲーターになっていただき、方向性を示してもらうことにしました。

■第１回目　2011年１月16日 13:30～16:30
参加者：70名（18か園）

子ども理解、「学びの物語」、そして保育の質について、森氏の講演の後『ワークブック１』（本ニューズレター No.16でも紹介、保育実践を高めるための試みとして、2008年７月・本研究機構作成）の DVD を用いながら、グループで話し合いました。

・子どもでなく、私が主になっている保育が多かったことに気づいた。
・学びを「子どもたちに○○させなければならない」「○○して」と、指示で子どもを動かしていたことを反省。
・園全体で話し合う機会をつくり、学ぶことが質の向

半日かけて、参加者一人ひとりが真剣に語り合う

上へつながるので、やっていけたらいいと思った。日々の話し合いを大切にしたい。

・たくさんの視点で見ることができたことは大きな喜び。ベテラン、若いとか関係なく、子ども・保育を語るって素敵。

・他の保育者と話し合いをすることで、違った意見を知り、互いに語り合うことで子どもに対する共通理解ができるのではないかと思ったので、自園に戻っても実行したい。

等々、子どもが主人公の学びの物語に出会い、子ども理解を深め、保育者自身を振り返り、園内研修へつなげていきたいとの声を多く聞くことができました。

■第２回目　2011年３月13日 13:30～16:50
参加者：80人（20か園）

まず前回を振り返り、子どもを見る視点についての学びがありました。

前回は『ワークブック１』を用いたのですが、２回目は参加者の園提案のDVDを観ながらグループで話し合いました。２度目のDVD視聴のとき、森氏に語り合いのポイントという交通整理をしてもらうことで、読み取り方に変化と深まりが生じました。そして、話し合ったことをまとめるというグループワークを行い、それをボードに書き表しました。

・２回目の研修会に参加して前回より、保育の語り合いという部分では、演習ができていたと思う。この演習を通して、自己中心の保育ではなく他者の意見を取り入れ、日々の保育にいかせたら、保育はより楽しくなり、保育士集団も共通意識がもてて、保育の質の底上げができると思う。

・評価で子どもを見るのではなく、今どこにいるかを見る視点でとらえ、苦手な『文字化』することに努力していきたい。この会に参加して、語れる自分自身の発見の場にもなりつつある。

・こういう語らいの場こそが、子どもの豊かな育ちにつながるのではと感じた。

多忙を極める保育士ですが、子どもをより理解したい、よりよい保育をしたいという思いは強いものがあると感じました。語り合うことで、自分だけでは気づけなかったさまざまな視点の共有があり、子どもに対する理解を深めていく手立てを感じとっていく様が見られました。

まだまだ手探りの段階で課題も多いのですが、１人、また１人と仲間を増やしながら、つむいでいきたいと思います。

（當間左知子●沖縄・パンダ保育園園長）

編集後記

◎２つの事例が“ふつうのことになる日”を願って

ミーハーだと揶揄されるかもしれませんが、鈴木先生の和光保育園がソニー教育財団公募のプログラム「科学する心を育てる」で最優秀園に選ばれたことを、わが事のように嬉しく感じます。まったく子どものチカラはすごい！そのチカラを執拗なほどに、ていねいに引き出す園風土はさらにすごい！と思います。子どもの科学する力と創造性、つまり“サイエンスの力”も“アートの心”も根っこの部分には「主体性」「探究心」が不可欠であり、その部分を引き出すためには、まず保育者集団が“子ども心”を持ち合わせることが何よりだと思われます。

また、遠山先生の事例にある、乳児期に「心の核＝自我」を育む子ども観、保育観（かかわり観）も保育界全体にしみわたるような運動を本研究機構としても取り組まねばならないと考えています。ほとんどの保育者は、今回の２つの事例に納得するでしょうが、では、ほとんどの保育者がこれと同じような保育実践を“ふつう”に行っているかといえば、なかなか厳しい実態があります。それはどうしてなのでしょう。それは、大人になる前の存在としての乳幼児に対して、彼らは未熟であり教え育むべき対象であるという認識が日本社会の広範囲で常識として蔓延しているからだと思われます。つまり、専門的知見が日々、進歩しているにもかかわらず、乳幼児に対する社会の認識や理解が無意識に無自覚に差別と偏見に支配されているといえるでしょう。

そんな状況を打破すべく、各地でさまざまな研修会が催されています。しかし、當間先生の報告にあるように、保育について語り合える園内の『対話的関係』や『同僚性』を形成することを前提に保育の質を高めたり、深めたりする研修はけっこう大変であることが実感できます。少なくとも国家レベルでは、子どもにとって望ましい“ふつう”の保育実践は「これからスタート！」だといえるでしょう。

（片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長）

❖問合せ
公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880／ FAX 03-3865-3879
URL http://www.zenshihoren.or.jp
E-mail ans@zenshihoren.or.jp